

しょうこくちゅう  
紙本墨書「向國柱書」保存修復報告

上江洲安亨<sup>\*1</sup>・當間 巧<sup>\*2</sup>

## 1 はじめに

平成21年10月から、22年3月までの作業期間で、(財)海洋博覧会記念公園管理財団首里城公園管理センターの所蔵の紙本墨書「向國柱書」軸装一幅の修復作業を行った。

本作品は向國柱筆の墨書であり、軸装に仕立てられている。修復前の表具は紙表具で、明朝表具に仕立てられていた。修復後も作品の風合いを損ねないように考慮し、同色の裂地を新調し明朝表具に仕立てた。今回の修復においては、作品の修復、表具のやり変えにとどまらず、管理者の依頼により、本紙の技術分析も試みた。

## 2 作品の状態

### 1) 形状及び寸法

紙本墨書の掛軸装であり修復前後の法量は以下の通りである。

#### (1) 修復前寸法 (写真1)

表具寸法 丈 199.0cm  
幅 66.2cm

本紙寸法 丈 119.2cm  
幅 53.7cm

#### (2) 修復後寸法 (写真2)

表具寸法 丈 201.2cm  
幅 66.2cm

本紙寸法 丈 119.2cm  
幅 53.7cm



写真1 修復前・表具全図



写真2 修復後・表具全図

\*1 (財)海洋博覧会記念公園管理財団 首里城公園管理センター 事業課 調査展示係 係長

\*2 石川堂

## 2) 表装

### (1) 修復前

形式 明朝表具（紙表具）  
上下・柱 白地紙  
筋 濃茶地紙  
明朝 薄藍地紙  
軸首 黒塗軸（写真3）

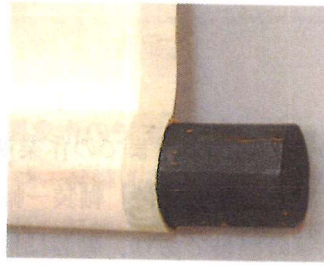


写真3 修復前  
黒塗りのみの旧軸首  
中軸の両端を黒塗し  
軸首としている

### (2) 修復後

形式 明朝表具  
上下・柱 白地小紋正絹上遠州（京都産）（写真19）  
筋 濃茶地高野裂（京都産）  
明朝 薄藍地蜀紅紋綸子（中国産）  
軸首 黒檀（中国産）（写真4）

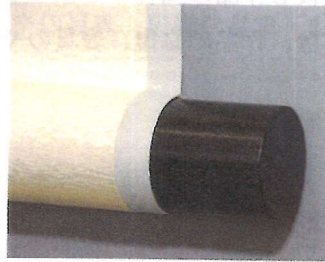


写真4 修復後  
新調した黒檀頭切軸

## 3) 修復前の損傷状況

- (1) 表具上部及び本紙には、染み・汚れが見られた（写真18）。
- (2) 本紙には、横折れが多数生じていた（写真6）。
- (3) 本紙には虫害欠損、破損、糊浮きが生じていた（写真5,14,16）。

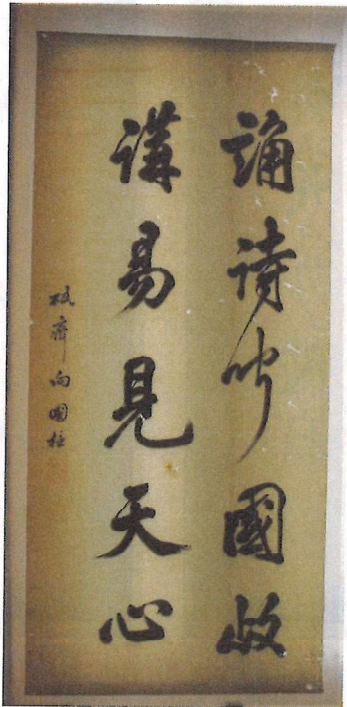


写真5 修復中・本紙表面（透過光写真）  
虫害欠損箇所が色の違いによって確認  
できる。



写真6 修復前・本紙全図  
下部より斜光線を当て折れを強調。



#### 4) 繊維組成試験

本紙、旧表装紙、裏打ち紙等の料紙特定のため、高知県立紙産業センターに繊維組成試験を依頼した。試験の結果は以下の通りである。

(1)本紙繊維は「竹」であるという結果を得た。また米糊の配合も検出されたことから、「米糊入り竹紙」だと推測される。

竹の繊維を主として製紙原料とする紙、とくに中国で若竹の繊維を処理して作られていた。竹の種類はきわめて多く、品質もよいが破れやすい紙。「米糊入り竹紙」別名を糊入れ紙ともいい、米糊を混和して漉いていたようである。膠剤としての機能と紙面を緻密に白くし、強度を強くする効果があったと言われている。しかし虫害にかかりやすいという欠点がある(写真7)。

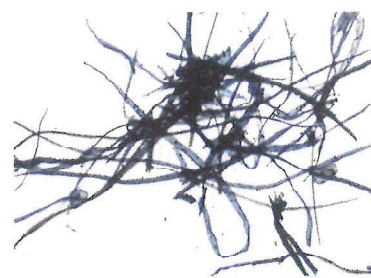


写真7 本紙・顕微鏡写真  
「竹」の繊維である。

(2)旧表装紙繊維は、「青檀」と「稲わら」の繊維であるという結果を得た。このことから旧表装紙は中国産の「宣紙」と思われる。ニレ科青檀属で中国に多く、青檀の皮は宣紙の主原料である。生産量がふえ原料不足となり、わらなど混和して漉かれていた(写真8)。



写真8 旧表装紙・顕微鏡写真  
「青檀」と「稲わら」の繊維である。

(3)旧肌裏紙(写真9)

(4)旧中裏紙(写真10)

(5)旧総裏紙(写真11)

(3)～(5)繊維は、「楮」の繊維であるという結果を得た。楮は、栽培しやすく収穫量が多い、繊維は太くて長く、強靱であり和紙の主要な原料である。



写真9 旧肌裏紙・顕微鏡写真

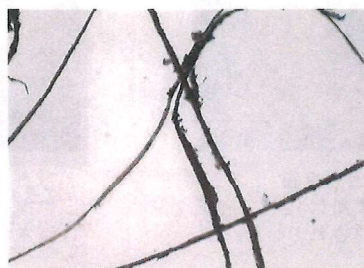


写真10 旧中裏紙・顕微鏡写真  
「楮」の繊維である。



写真11 旧総裏紙・顕微鏡写真  
「楮」の繊維である。

### 3 修理方針

修復前の調査に基づき以下の修復方針をたてた。

- 1) 墨の剥落止めを行う。
- 2) 本紙の虫害欠損、破損箇所に適する補修紙で繕いを施す。
- 3) 本紙の汚れの除去を行う。
- 4) 本紙の横折れが生じている箇所、及び今後明らかに生ずると思われる箇所に折れ伏せを入れる。
- 5) 表装裂、軸首、環、上軸、中軸、掛け紐、を新調する。

- 6) 収納箱として、太巻添軸桐印籠文化財保存箱を新調する、収納保存にあたっては太巻添軸を添えて巻き、折れ破損の要因を軽減する。又木綿の袱紗を新調し表具を包み収納箱に保存する。
- 7) 料紙特定のため、高知県立紙産業技術センターに委託し、繊維組成試験を行う。

#### 4 修復仕様

- 1) 修復前に写真撮影を行い、本紙の状態を調査した。
- 2) 薄膠溶液を用い、部分的に墨の剥落止めを行った。
- 3) 表装を解体した。
- 4) 汚れの除去を試みた、作業は本紙を傷めない範囲にとどめた。
- 5) 本紙を養生紙で表打ちし仮張り後、本紙旧肌裏紙を捲り取った (写真12,13)。



写真12 修復中・本紙裏面  
肌裏紙を残した状態。旧肌裏紙は12枚の和紙を継ぎ合わせて、裏打ちが施されていた。



写真13 修復中・本紙肌裏紙の除去作業  
旧修復では、虫害欠損箇所の補修（繕い紙）は施されておらず、裏打ちのみの処置であった。



6) 本紙裏面より、虫害欠損、破損箇所類似の形に切り取った補修紙を用いて繕いを施した。補修紙には本紙の風合い、質感などの点から古紙(竹紙)を使用した。糊は小麦粉澱粉糊【新糊】を用いた(写真14,15,16,17)。



写真14 修復中・虫害欠損箇所(透過光写真)

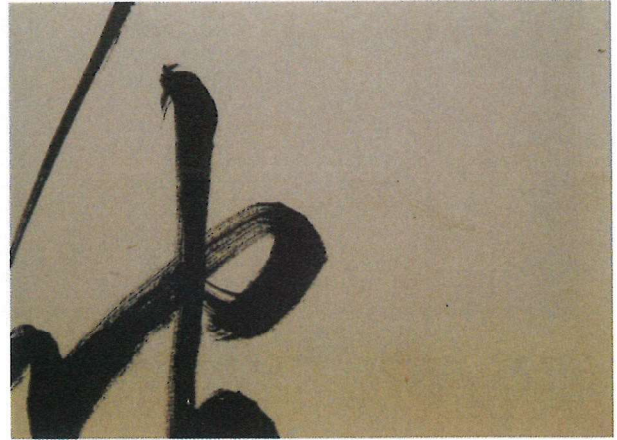


写真15 修復後・虫害欠損箇所(部分)



写真16 修復前・破損箇所(部分)



写真17 修復後・破損箇所(部分)

- 7) 新糊を用い美濃紙で本紙の肌裏打ちを施した。肌裏紙は天然染料(矢車)で染色、水酸化カルシウム溶液で媒染後使用した。
- 8) 表装裂を選定し美濃紙で肌裏を打った。糊は新糊を用いた。
- 9) 本紙、表装裂に美栖紙を使用し増裏を打った。糊は新糊を複数年鍾乳洞にて保存したもの【古糊】を使用し裏打ち後、仮張りを施こした。
- 10) 本紙の横折れが生じている箇所、今後明らかに生ずると思われる箇所に折れ伏せをいれた。折れ伏せ紙は楮紙用い、糊は新糊を使用した。
- 11) 本紙と表装裂を付け回し、古糊を用いて美栖紙で中裏を打った。裏打ち後、仮張りを施した。
- 12) 古糊を用いて宇陀紙で総裏を打ち、仮張りを施した。
- 13) 鏝、軸首、上軸、中軸、掛け紐等を新調した(写真4)。



14)十分に乾燥させた後、表具に仕上げた。

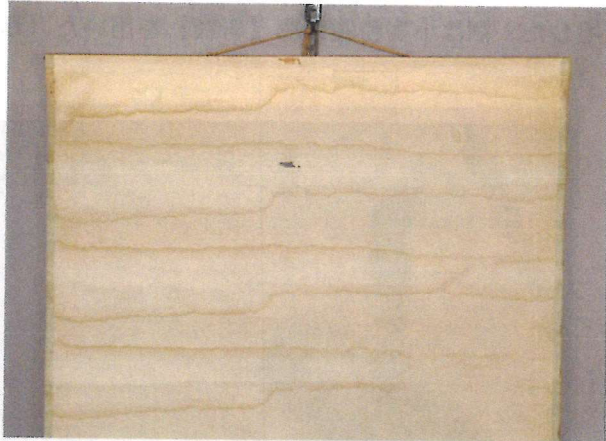


写真18 修復前・表具上部写真  
紙表具で、明朝表具に仕立てられていた。表具には、染み・汚れ、欠損が見られた。

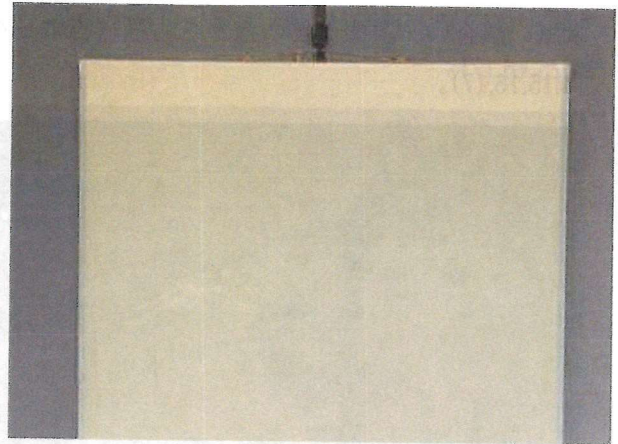


写真19 修復後・表具上部写真  
裂表具に変更し、明朝表具に仕立てた。

15) 収納箱として、桐太巻添軸桐印籠文化財保存箱ならびに、紙帙を新調し、表具を木綿の袱紗に包み収納保存した (写真20)。

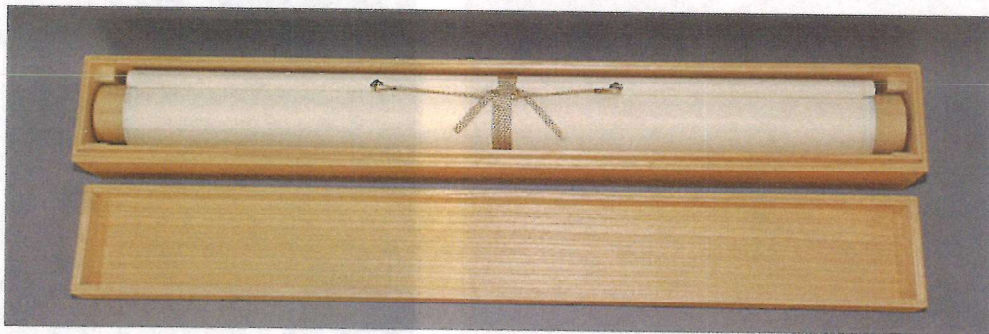


写真20 桐太巻添軸桐印籠箱

## 5 結び

現在、目にすることができる文化財（絵画、書籍）などは、何度かの修復を繰り返されて今日に伝えられ、後世に守り伝えるためには、どうしても定期的に修復を行わなければならない。

今修復作業を行った「向國柱書」軸装の、旧表装紙には染み、汚れ、劣化、欠損があり強度的な事、長期的な保存を考慮し、元使用せず修復後は、作品・表具の風合いを損ねないように考慮し、同色の裂地を新調し形式も同様に明朝表具に仕立てた (写真2)。また、紙表具で中軸の両端を黒塗し軸首として使用している点など (写真3) 時代など特定はできないが、琉球で施された表具と思われた。そこで、旧表装紙、裏打ち紙等の繊維組成試験を依頼した。試験結果、琉球和紙の繊維などは検出されなかった (写真8,9,10,11)。しかし琉球和紙などを使用せず、琉球で施された表具とも考えられる。

今修復においては、本紙の虫害欠損、破損箇所の補修、多数横折れ箇所の修復、旧表具の同色裂地を、新調しての表具のやり変えなど、出来る限り風合いを損ねることなく修復を終える事ができた。また将来、表具自体に琉球和紙を使用した作品に出会ってみたいものである。